

向全旗

六月号



平成26年6月発行 第40号

白金葭定例句会案内 (*は吟行句会)

増田陽一

七月十八日（金）12:00～15:00（アビスター第四学習室）

兼題：半夏生、麿はつたい

八月十五日（金）蓮見舟吟行（手賀沼小池ボート9:30出船

12:00～15:00句会（アビスター第三学習室）

九月十九日（金）12:00～15:00アビスター第四学習室）

兼題：宵闇、竹の春

半夏生、麿はつたいの参考句（7月18日分）

耿々と半夏雨降る神田かな

鯉の口朝から強し半夏生

父死んでやがて母死ぬ妻こがし

遠い日へぶつと吹き出す麦こがし

月例句会報、14／6／20 10名欠2 パセリ、蚊帳（）

飯田孝三

巴里祭近づく朝。パセリセロリ

バルテユス展終りに近き夏椿

麦秋の木馬の眼青くぬる

椅子の少女片膝立てる夷明むぎあかり（バルテユス展）

青蚊帳をきちとたゝみて銃後ちふ

梅雨しとど卵を十粒買ひに行く
葦切のまた渡りきて沼燃ゆる

蚊帳に入る浮世絵白き夕べかな

荒梅雨の音交響すわが眠り

誰が袖の屏風に。パセリありし如し

光成高志

パセリ。パセリみどり密なる。パセリかな

蚊帳に寝る母の胎内かくあらむ

四つん這ひ蚊帳を一周裾拡げ

蟻の巣を寄せ付けてをり。パセリの根

梅雨晴や源氏物語げんじもありてバルテユス展

光みち

胎内のごと幼な児の蚊帳に寝る
セリ科なる。パセリとセロリ離し売る
口と鼻近くにありて。パセリの香
蚊帳の裾波立て入る母なりき
日捲りの纏めてちざる梅雨入かな

吉羽多美子

浅野正美

明り消し螢放す蚊帳の中

むぎとろや半寿を越える母のゐて
短夜のさわぐ鴉に目ざめけり
もてなしに鉢植ゑバセリ色を添へ
あぢさゐの山道行けば不動尊

倉田紀子

青木啓泰

垂乳根の母の軽さよ蚊帳捨てる
緑陰にゴミにくくつた蚊帳がある
パンバセリちぎつて食いぬ父の日に
父の日の料理にバセリが添えてある
葭切に何話しても会議中

松村幸一

武者昭七

青梅雨や靈堂昼の鐘打てり
縫物の母みて寝落つ蚊帳かな
緑陰の木椅子に語る戦かな
鍋磨く厨に風の麦の秋
白南風や胸の剥落仁王像

ベランダにパセリ昭和を生き凌ぎ
翡翠に飛びすぎるものみな緑
翡翠の瑠璃を絞つて飛びにけり
母と待つ父の帰りや雨の蚊帳
たらちねと川の字に寝し蚊帳の底

糠雨にふきぎ心や花石榴

捨てきれぬ蚊帳の納まる納戸かな
皺の手に過ぎし齡を梅漬ける
どくだみの花の白々人来ぬ日

亡き母の西洋料理バセリ置く

工藤宏子

パセリつて脇役ですが実力派

去りし子の記念樹たわわ夏みかん

蚊帳吊れば猫の出入り恨めしく

四隅寄せ背せり伸びては蚊帳置む

水辺層合歎にお邪魔のギギギギギ

半夏生六月はやはや白くなり

合題蚊帳物置の中を探した

食事は僅かのはせり一、食の

父の田舎元々一人の肩こりが

卷之三

選句結果（数字は入選数
左添書きは添削句）

4 パセリつて脇役ですが実力派

3 4
ヘラン外にハセリ昭和を生考凌考
椅子のひぬ片膝立てる表用あかり（シ

蚊帳に入る浮世絵白き夕べかな

3 捨てきれぬ蚊帳の納まる納戸かな

宏子一幸三孝二一陽一美子多

高志 みち 幸一 多美子 みち
高志 陽一 みち 紀子 紀子 紀子 紀子 紀子
高志 宏子 陽也 陽也 孝三 孝三 孝三 孝三
高志 みち 紅葉 みち 紅葉 みち 紅葉 みち

綠陰の木椅子に語る戦かな
蟻の巣を寄せ付けてをりパセリの根
パセリ。パセリみどり密なる。パセリかな
むぎとろや卒寿を越える母のいて
むぎとろや卒寿を越える母のゐて
荒梅雨の音交響すわが眠り
縫物の母みて寝落つ蚊帳かな
パセリ噛む音さえざえと朝の卓
パセリ噛む音のさえざえ朝の卓
明り消し螢ほたる放す蚊帳の中
明り消し螢ほたる放す蚊帳の中
バルテユス展終りに近き夏椿
水辺昼合歓にお邪魔のギギギギギ
幼な児の胎内のごと蚊帳に寝る
胎内のごと幼な児の蚊帳に寝る
食卓に僅かのぱせり一寸食べ
誰が袖の屏風にパセリありし如し
どくだみの花の白々人来ぬ日
梅雨晴や源氏物語ありバルテユス展
梅雨晴や源氏物語げんじもありてバルテ
セリ科なる。パセリとセロリ離れ売る
セリ科なる。パセリとセロリ離れ売る
去りし子の記念樹たわわ夏みかん

高志 紀子 正美 陽一 紀子 正美
宏子 みち 高志 多美子 陽也 陽二 宏子 孝三 みち 正美 昭七

翡翠の瑠璃を絞つて飛びにけり
父の日も老人二人の昼となる
父の日の料理にパセリが添えてある
まな板にパセリの香りしみてあり
短夜やさわぐ鳴に目ざめけり
短夜のさわぐ鳴に目ざめけり
蚊帳吊れば猫の出入り恨めしく
今年こそ大きな実をとザクロ咲く
翡翠に飛びすさるものみな緑
まとひつく蚊遣りの匂ひ手で払ふ
糠雨にふさぎ心や花石榴
蚊遣火に焚かんとすればよもぎ薰りけり
蚊遣火の蓬を焚けば薰りけり
亡き母の西洋料理パセリ置く
もてなしに鉢植ゑパセリ色を添へ
あじさいの山道歩む不動尊
あぢさゐの山道行けば不動尊
緑陰にゴミにくくつた蚊帳がある
日捲りの纏めてちぎる梅雨入かな
畠まんと振れば吊り手の鳴りにけり
吊り手鳴る蚊帳畠まんと振りをれば

幸一 昭七 啓泰 陽也
宏子 陽也 幸一 昭七 正美
多美子 多美子 昭七 昭七 正美
正美 多美子 昭七 昭七 正美
多美子 みち 啓泰 陽也
昭七 みち 啓泰 陽也

一句鑑賞

光成高志

青梅雨や靈堂屋の鐘打たり

紀子

梅が青く実る青梅雨最中の昼下り、作者は宗吾靈堂にお参りし、義民・佐倉惣五郎のことを想い、鐘楼の鐘を打つたのである。「昼の鐘打てり」と「青梅雨や」と切つた時間空間が響き合つてその義民伝説の思いが広がる。

印旛沼の甚平渡しはその縁のあるところ、一帯には房総風土記の丘があり、そこからも望める印旛沼、そして丘陵地の佐倉藩の城址公園や武家屋敷、堀田庭園など佐倉は歴史豊かな地である。啓泰さんの霞ヶ浦、印旛沼、それに吾らの手賀沼は昔、香取海といって繋がっていたとか、青梅雨がよく似合う土地柄と思う。「鐘打てり」はこの靈堂が正しくは鳴鐘山東勝寺宗吾靈堂ということと繋がつている。

梅雨しとど卵十粒買ひに行く

陽一

梅雨の雨の激しく降つてゐるのを冒して卵十粒を買ひに出た。それでどうしたといわれそうだが、この行為に生活のために行かざるを得ない事情があつたのだし、そこに、仄かなおどけ洒落とも云うべき諧謔が漂う。以前、私は十六夜に葱を買ひに行つたことを句にして誰かの選に入つた覚えがある。もつとも、蕪村に同工異曲の句があることは後で知つたが。梅雨と卵買ひは新しい。

四隅寄せ背せい伸びては蚊帳畳む

宏子

子が背伸びして蚊帳を畳む仕草を詠られたのが原句であつたが、子に限らず、背せい伸びては蚊帳を畳む仕草に蚊帳の本意を見出せるので、子を取つたのである。背比べという言葉もあるから、「せいのび」と読むのは間違いではない。牡丹をばうたんと長く読ますのと同じ理由である。それにしても蚊帳の兼題で蚊帳を畳むのが三句出たが、やはり、蚊帳には寝てもらいたいものだ。

青蚊帳をきちとたゞみて銃後ちふ

孝三

青蚊帳をきちとたゞみて銃後のかなみであるというのである。蚊帳をぐるぐるまるめて仕舞うのはたしなみがない。そんな荒っぽいことでは、前線で戦つている兵隊さんに申し訳ないと想えとかなんとか言われてしまう。戦前の日本であった。國家総動員態勢は銃後という言葉を生み出したのである。

畳まんと振れば吊り手の鳴りにけり

昭七

これも蚊帳を畳む句である。蚊帳が入つていないので左のように直しました。

吊り手鳴る蚊帳畳まんと振りをれば

吊り手の先に金具の輪が付いているので、蚊帳の四隅を持って裾を振つてそろえて畳まんとしている時に互いに金具が触れ合つて鳴るのである。蚊帳を畳む様子が目に見えるようである。

一句鑑賞

飯田孝三

口と鼻近くにありて。パセリの香

みち

パセリつて脇役ですが実力派
パセリは西洋料理の添えものやスープの香味料として欠かせない名「脇役」である。芳香高く、鉄分、ビタミンA,Cなど豊富、縮れた小葉が密集する葉が束生し、緑のパンチが効いて出色。食卓に潰刺の気を漲らす。見てくれ、中身も紛れなき「実力派」。歯切れよい口調が、情韻相乗、句趣を高める。西洋渡来の句題「パセリ」に相応しい日常語、口語詠の手柄である。

皺の手に過ぎし齡を梅漬ける

多美子 幸一

兩句とも歩んで来た歳月を振り返る、それぞれ身辺、世の移りを。前句、少量の梅を漬けながら、手の甲にふやす皺を目にし、昔、たくさん漬けていた母や祖母の姿を思い浮かべる。家族、友だちと過ぎした、あれこれの場面が甦る。「を」が膾。懐かしくも遠い日々である。後句、ランダにパセリを育てながら、苛烈、酸鼻を極めた昭和の歲月を今更に偲ぶ。飽食、少子化と悩み絶えぬ世ながらも、目先、平穀に日々は過ぎる。「凌ぎ」が要即ち、小青年期を銃後、兵営にうち暮れ、敗戦後は復興の主役として寧日なかつた、人生九十年、今も矍鑠たる作者の述懐である。

四つん這ひ蚊帳を一周裾抜け

高志

昭和の時代は子供が多かつた。夏の蚊帳は、大抵、年嵩の兄姉が吊り、幼い弟妹は潜り入り、四隅を這いながら裾を整える。どの家でも兄弟姉妹が順に引き継ぐ役割だった。過ぎし日の産土の一齣を思い起し、在りし日の祖父母、父母の面影を追う、そして、隔て住むはらから上の上をふと思う。「を一周」は「蚊帳一回り」もあるだろうか、這い回る動きが更に見えてくるかもしれない。
蚊帳に入る浮世絵白き夕べかな
蚊帳が普及したのは、室町から江戸にかけてらしい。以来、家庭に欠かせぬ夏の調度だったが、都会では、昭

和三十年代頃から、住居環境が変り、使われなくなった。勢い、題詠は回想風になる。さて掲句、蚊帳越しに襖絵か屏風絵の浮世絵を眺める図ともとれよう、タベ白く浮き上がる像が艶である。ただ、書割が揃いすぎないか、蚊帳にいて夢現の境を行く、そうみたい。「浮世絵白き」は清長か歌麿か。ぐぐり「入る」蚊帳は、つまり夢現の結界。ひそやかな蚊帳の裡にあえかの桃源をたずねるのである。蚊帳は、多く一人居の孤愁、家族愛、男女の情炎などを詠うが、掲句は、それらをぬけ、純粹・独自である。「白き」は「夕」にもかかる。「海くれて鴨のこゑほのかに白し」（芭蕉）を想い起こす。

（平26・06・23）

一句鑑賞 武者昭七

半夏生六月はやばや白くなり 陽也

六月に入るとそれを待ちかねたようにして早々と半夏生が白く染まつた葉をひろげる。白い花は六月によく似合う。白は初夏の装いである。季節の移ろいに注ぐ作者のこころと目がやさしい。

荒梅雨の音に交響すわが眠り

豪快な句である。「交響す」といふ「わが眠り」というあたりダイナミックな響きがある。夢の中まで響いてくる豪雨の音を疾走する荒々しい交響曲の如く心地よく聞

いているのである。それはなによりも健康な証です。これからもご健闘を。

捨てされぬ蚊帳の納まる納戸かな 多美子

一読共感。わが家の押入れにもこの間まで片隅に押し付けるようにして置いてあつたけ。手狭もあるし、簡便な駆虫剤が容易に手に入る時代だし、もう使う機会もあるまいと思いつつ廃品回収に出してしまつたけれどそれでよかつたのかなア。あれはおふくろが買つてくれたものだったのに、なんて今も時々考えてしまう。

たらちねと川の字に寝し蚊帳の底 幸一

そうそう、その通りでした。幼く貧しかつたあの頃は家族がみんなで肩を寄せ合つて生きていた。（兼題の「蚊帳」は今となつては時代物となつてしまつたのでしょうか）しみと愛惜の句が多かつたようです。

バルティス展終わりに近き夏椿 孝三

バルティスは「少女」から「女性」へと移つていくその「推移」を描いたのだという。謎めいた絵で多くの人を集めめたその絵画展も終りに近く夏椿の季節もまた終わりに近づこうとしている。なにごとも終わりはさびしくそこにこそ本来の姿が現れると説いたのは兼好法師だつたかしら。さらば美しき少女たちよ！（2014・06・21）

一句鑑賞（39号分）

飯田孝三

飾武者甲冑櫃に腰掛けて

みち

みちさんが急に体調をくずされ欠席、高志さんが出句を代行。短冊かその書写しの行違いで、句会では「武具飾る甲冑櫃に腰掛けて」。掲句が正句。さて、桃の節句が終ると、デパートの人形売場は主役が替る。武者人形や武具飾りの豪勢なセット等が勢揃い。おや、と目を止めたのが、威風堂々の甲鎧飾り、昂然と肩を聳やかすかと思ひきや、櫃（保管匣）に腰掛ける。足元が心許ない。さて、甲鎧の展示なら、お城や美術館で観ている筈だが：。

そういうえば、小物の鎧飾り（単品）も袱紗をかけた小櫃にのせたな。甲鎧飾りの厳しさと居すまいのちぐはぐがきわり。平談、巧まぬ諧謔が逸。出句は、逆に、いやついでに、飾り手も腰掛けさせたかと思つたが、読み手の面白がりすぎ。掲句は正統、品格の一句である。（平26・06・06）

する美の偶像であり、自身の化身ともいえるだろう。一方、「共犯」の猫だが、バルテュスが幼年から、その神秘な気紛れさを愛し、作品中に頻々、登場させる画家の分身である。『夢見るテレーズ』では、椅子に片膝を立てる少女の独特のボーデの足元で、猫が皿の間にかを食べている。生とエロスの深淵を覗かせられる。さて、共犯の「犯」、世の中の撻破りの行いをいう。その時代の倫理、習俗から、広く、芸術分野での主流にくみせぬ流儀・マチエール等にわたる。会場は、異端、退廃、かつ高踏の氣韻がみなぎり、化身、分身が共演してその粹を究めるのである。「春尽きて」は、見にいかれた個展初期、暮春を踏まえつつ、画家バルテュスの生涯、また現西欧画壇の趨勢を思うのだろうか。何しろ、ピカソをして二十世紀最後の巨匠と言わしめたバルテュスである。

（平26・06・19）

ハガキ句41 報管見

飯田孝三

水溜りいくつもあつて神の留守

高志

バルテュス展が上野で開催中だが、それまで、画家とその画業について殆ど知らず、互選では、ただならぬ句と感じつゝとれなかつた。早速、拝観におよぶ。

少女は、『夢見るテレーズ』を始とする画中の少女像である。それは、彼が描きつけた危うい官能の美を象徴

旧暦十月、水溜りだけがそこにある。神々は留守。「いくつもあつて」が眼目。余談無用。納得の一句である。なるほど、俳句は言わぬ文芸だ。読み手それぞれ、足もとの水溜りを見つめ、神去る空に聞こう。

手許の幾つかの歳時記を繰つてみた。目に止まつ

のが左だが、掲句をいたぐ。「神の留守椎の塵掃くばかりなり」（奈良鹿郎）、「神留守の汐木を焚きて驕るかな」（源義）、「雨あとの零にぎやか神送」（狩行）。これらは、魂胆や拘えが見え、抜けきらぬ。「うん、そうだよな」を出ない。「神の留守」は、出自に因んで歳時記の分類「人事（宗教）」、例句は、現代俳句では、「時候」に適うが、よりふところがより深い。

秋雨に硝子戸閉ざす履き物屋

これまた、言わず、示す。秋雨に硝子戸を閉ざす履物店。店棚のあれこれが見え、街並が見えるてくる。秋雨に「履き物屋」の照応がいい。しみじみ秋（「履物店」では句にならぬ）。それでいて、古くない。「硝子」戸のかがやきのせいだろう。そして、韻きの。

A Ki Sa Me Ni Ga Ra Su Do To Za Su Ha Ki Mo No Ya。音が

透明、白秋。かつ、上下に挟む中七濁三音は、秋寂に通う。中七u二音が透き、通してi音が「はきはき」利く。因みに、a六音中三は上中下句頭韻を踏む挟む。就中、上下は a i を重踏。

秋深む旧本陣の釘隠

年代物の旧本陣建物が彷彿する。「秋深む」は、積もる歳月か歴史の重みか。「釘隠」がむろん贍。

つぎはぎの縄文式土器木の実落つ

縄文土器と木の実の取合わせが勘所。i音反復が面白

たか子

い。「落つ」は？

秋黴雨天水桶を溢れけり

結は「けり」か「をり」か。前者は溢れ過ぎないか。

裕子

英明

ハガキ句41報（08・10・28）

墓碑の字の彫りに溜まるや秋の雨
鉢の蓮枯れて一期一会の碑

行く秋の風澤重くなりにけり

秋雨に硝子戸閉ざす履き物屋

雨宿りしたる車庫中千日草

秋黴雨天水桶を溢れけり

秋深む旧本陣の釘隠

水溜りいくつもあつて神の留守

秋風や川に真向ふ鮭地蔵

遠くより来て遠のけり秋の川

秋雨の運動公園ナスカの絵

たか子

高志

瞳子

不憫

多佳子

英明

妙子

彰一

孝三

妙子

裕子

英明

裕子

意外な発見。ただ、「中」が出張らないか。

行く秋の風澤重くなりにけり

かほる

さて「重く」は、ぐるり裸木ふえる風澤の存在感? 重すぎないか。

秋風や川に真向ふ鮭地蔵

瞳子

景が見える。「真向ふ」が浮き気味。

不憫

遠くより来て遠のけり秋の川

〔遠くより来て〕で切れるとも、〔けり〕でとも、とれる。前者なら、一人称。遙けく來たる堤上、眼前、秋の川を展望する。下流である。そうとりたい。後だと、木々落葉、川筋がよく見えるの叙に止まる。

多佳子

秋雨の運動公園ナスカの絵

雨中、秋の運動会風景だろうか。そうなら、「ナスカの絵」は児童らが展開する遊戯の鳥瞰図か、それとも、公園の花園区画模様のそれか?

鉢の蓮枯れて一期一会の碑

妙子 彰一

〔一期一会〕が分からぬ。もう「」に来ることはない?

妙子

墓碑の字の彫りに溜まるや秋の雨

情景は見える。妄言多謝。遅くなりましたが、以上お送りします。

(H 20 · 11 · 21)

お便り広場（到着順、敬称略）

三日はお土産まで頂き本当にありがとうございました。

辻哲郎「古寺巡礼」にも亀井勝一郎の本にも出てくる。同級生の近況等、メールでお知らせ下さい。早速のお便り有難うございました。

(6 · 3 友井珠恵)

早速書庫に入り探しましたら秋桜子「現代俳句季語解」がありました。皆様辞典を持参しての参加見事ですね。完全に圧倒されました。もう少し元気を出してガンバルやうにします。みちさんにもよろしくお伝え下さい。とにかくすばらしい人生のやうでビックリしました。白金葭をとにかく読むことから始めます。(5 · 5 小山陽也) 白金葭第五月号拝受致しました。全頁ユルミなく充実していますね。ただただ圧倒されています。毎月俳誌を頂くだけで十分です。今の庭は泰山木とさつきとドクダミが花盛りです。とにかく人生前向きに進みたいと思つております。今後ともよろしくご指導の程お願い申しあげます。皆様の益々の御活躍を祈ります。

(5 · 7 小山陽也)

先日の日洋展、三原様にもお会い出来てよかったです。絵を画く方々のエネルギーもすごいですね。お話を聞く機会を持って同級生の他の方々にもお会い出来ると尚嬉しかったのですが···訂正です。年のせいか、記憶違いが多くて···ミステリー作家 内田康夫「平城山を越えた女」新薬師寺の香薬師仏は二度目の盗難にあい、現在もみつかっていない。とても素敵な仏像で、和辻哲郎「古寺巡礼」にも亀井勝一郎の本にも出てくる。同級生の近況等、メールでお知らせ下さい。早速のお便り有難うございました。

どうも駄句ばかりで反省しています。驚いたことに一年振りに不整脈がなくなりました。そのうちにリニヤーに乗れますね。皆様によろしくお伝え下さい。会費同封しました。古代は別便です。（6.19 小山陽也）

前略 定例句会出句いつもお手数お世話になつております。今回もよろしくお願ひ致します。パセリ蚊帳句稿は送信（ファックス）申します。会費千円同封申します。御自愛下さい。不一（平成26年6月19日木午前 青木啓泰）

河村博旨様

「徐に巨船入れたる湾の春」ご鑑賞に答えて

俳句の先輩から、以前、結社誌の掲載句などは、普通自分の句しか見ないものだと聞いた覚えがあります。『白金霞』のまだ面識もない者の句に隅々目を通していただき、有難うございます。確か三月中旬、豪華客船クイーン・エリザベス号が、横浜に来航、なにぶん巨船ゆえ、レインボーブリッジに問え入港できず、引汐を待つて、漸々、埠頭に接岸しました。その豪壯、優麗な姿をテレビで見て、たまたま件の拙句を得ました。邪道とされるテレビ俳句です。同船は世界周遊途上の寄港。「春の汐ひいて湾橋巨船許す」は同時作。これが発句の経緯ですが、それはそれ、俳句は、僅か十七音、余白は読者の空間、読者十人十の正解といわれます。それぞれ自在に余白を飛翔、時に作読共感するならば、俳句はまさに作読交響

の小匣でしよう。どうぞ今後ともよろしくお願ひいたします。この夏も異常気象がつづきそうです。くれぐれもご自愛のほどを祈りあげます。

（平26.05.31 飯田孝三）

六月例会でみちさんの元気な姿を拝見して安心しました。これからもご自愛ご活躍をお祈りします。

39号所収の孝二さんの蕪村句（方百里雨雲よせぬばたん哉）の評釈に共感しました。「雨雲よせぬ」とは百里のかなたからひたひたと寄せてくる雨雲とそれを振り払う

よう。元気な姿をこめて咲き続けるばたんとのせめぎ合うまさ。「寄せぬ」とは否定形を通して逆に寄せてくる雨雲と、ひと茎の花ながら精一杯それに対峙するばたんの強烈な意志の表現をいうのでしよう。雨雲がやがて篠つく豪雨をもたらし、ばたんを無残に蹴散らすとすればそれは蕪村を取り巻く横暴無慈悲の人間世界のありようとも大自然の猛威ともとれようし、蕪村が共感したのはそれに立ち向いおのれを持せんとするものの孤高の姿をばたんにみたからであります。

（2014.6.12 武者昭七）

「俳窓雑感」欄（第39号）の小見にご好評をお寄せいたとき有難うございました。諸家の俳句評釈・解説の類を読んでいると、時に、おや、と感じことがあります。件の蕪村句もその一つですが、日頃得心いかなかつたと

ここに、起稿中にふと思ひ浮んだことどもを、纏めた一文ですが、貴兄の共感と過ぎた評をいただき感謝にたえません。愚見を更に敷衍された玉稿のお蔭で、初めあまり目に止めなかつた（結社誌などでは普通そぞらうい）向きも改めて駄文を見返してくるでしょう。お礼申しあげます。古今秀句鑑賞の類を見ると、「学究」の理解、「読者」の感想を出ない記述を見かけます。それらが誤りとはいひませんが、文字面や印象の表層、一面だけを見て能事終れりとする風があり、実作の実感から遠いものがあります。しかし、それは業俳を始め俳徒一般の不届きのせいという外ないでしよう。業俳は、思いの外世上の権威に弱く、勉強不足な気がします。だから「鑑賞」分野での発言がない。俳誌経営とコミュニティの付き合いでも手一杯です。俳句は作読同身の文芸、実作の怠慢です。

自分の俳句を磨き、豊かにするうえでも、古典、現代の「名句」鑑賞は欠かせないと想いますが、貴信へのお礼のつもりが、ごたくを並べてしましました。お許しを。六月例会での再会を楽しみにしていました。異常気象下での梅雨、御身大切に。草々

感謝いたします。みちさんが元気になられ、良かつたで感
先日の句会では、例により大変お世話になりました。
感謝いたします。みちさんが元気になられ、良かつたで

昭七兄

(平26・06・15)

孝三 拝

すね、ほつとしました。これからは、無理なきらないようになります。また、丹精された野菜をいろいろいただき、有難うございました。例月、お手数をかけますが、右の拙稿をよろしくお願ひします。荒梅雨ゆえ、ご自愛、ご健吟を。

(平26・06・24 飯田孝三)

受贈誌（六月号）

竹の秋ホーム百歩の無人駅（彩117号）

平野ひろし

竹の秋急行電車みな通過（リ）

〃

九十が九十介護雪しんしん（リ）

〃

籬道具文管に源氏物語（リ）

〃

一石の矢切忌日の川寒し（飛行雲71号）

駿河岳水

徒歩遍路銀行に来て金下ろす（リ）

〃

捨て杭に花屑溜る澱みかな（あすか6月号）

山尾かづひろ

こだま（俳誌交換主宰選）

彩（主宰平野ひろし）

116号より

初写真何回撮つて眞面なる

光成高志

春の日を返す田中の水たまり

〃

同117号より

春の水藻の尾をゆらし流れゆく
幅広く日脚の映る春の海

光成高志

飛行雲（主宰駿河岳水）H.
26年夏号より

〃

鐘うつら上野浅草初昔
騎馬像の前も後も青嶺なる

飯田孝三
光成敏子

俳窓評論纂

* 青江由紀夫さんの海峡派第130号の中の印旛沼での釣中最中の想像を克明に書かれてあるのに共感しましたので、芭蕉との関連にて少し敷衍しておきます。佐倉藩の祖先は堀田正俊（一六三四一八四）であり、彼は大老までなった。眞面目に勤務して逆に綱吉に疎ましく思われたのは、ほんとらしい。綱吉が思うように出来ないので、後述の稻葉正休まさのりに殺させたのだという噂までたつたとか。この堀田正俊に新井白石が再就職して二年後の貞享元年（一六八四）、殿中で正俊は従弟の稻葉正休まさのりに刺し殺された。その嫡男が家を継いだが、封を減らされてしまつたので、家臣たちの俸禄も減り、家を離れるものが多かつた。白石は一度主従の義を結んだからにはこのよう時に去るべきにあらずと、頑張つていたのであるが、元禄四年に致仕を乞い、牢人となる。この牢人は二回目で三年間であった。一回目の牢人は延宝五年から天和二年の五年間に及び、俳諧にも凝つていた。その時江戸では芭蕉こと桃青が名をなしており、白石が桃青などと競りあつたと室鳩巣書簡集の「兼山秘策」に書かれてある。正俊、白石、芭蕉、西鶴、綱吉は同時代人で

あつた。堀田正俊は異常死であつたので、その墓の銘は名を変えて刻まれて、佐倉の甚大寺にある。元禄時代になると、もう昔の大名は一人もいない太平の世となり、「春光始めて麗かに、桃李一時に花咲き紅白妍を競いて、絢爛錦の如き一の黄金時代を形成しぬ」という世相であった。貨幣経済が農村まで浸透して、実質的な生活の余裕が出ていた故に、田舎者まで江戸の町人の真似をするようになつた。武士にあつては、同僚と出会いえば、金の話、損得の考え、内証支えのはなし、衣装の吟味、色慾の雑談ばかりで、これを是非なき風俗といった。綱吉の狂信的な治世の下では、表立つて何かやるという訳にもいかず、世に流されていけば金に追われて汲々と生きて行かねば成らず、芭蕉ならずとも、人生を考えたであろうと思う。芭蕉が日本橋から川向うの深川に隠棲したのは延宝八年冬であり、綱吉の登場と同年である。これが芭蕉隠棲の動機とは思えないが、そうでもないようにも思える。芭蕉は、国許での十年、江戸に下つて十年このままではいけない、いけないとthoughtしていたのだ。この辺りは、「芭蕉の軽み以後」にて書こうと思つています。

* 四月に竹工芸作家の門田祐一さんの作品を見た。五月には日洋展の初日、三原君が出るというでその重鎮画家達の座談会を聴いた。六月には、陽一さんの句を理解しようとバルテユスの絵を見に行つた。三原君の座談会

を聞いて、今までの作品のこと、人伝に聴いていたこと皆合点が行つた。初冬という日赤の通りを画いた絵は記憶にあつた。四十代になつてモチーフを瀬戸内海の光と空気において磯の岩と波を画いているとか。この時の女性画家の詞、五年ごとにモチーフを変えてきたが、なにより続けることが大事という。小磯一機さんは、何で私

みたいな者が呼ばれたのかわからない、私は芸術のため

に画いているのではない、ヨモツヒラサカを画いた、青

木繁が好きで、グレコ、レンブラント、ゴッホが好きだ

と言われる。古事記を題材にした想像絵ばかり画いてい

る。この人が私には面白かった。皆さんの話を聞いてみ

て、絵画も俳句も根幹は同じだと思った。バルテュスの

絵を見て帰つて、以前から思つていた絵のモチーフはどう

決めるのかを考えてゐて、志賀幹司さんのウエブギャ

ラリーに出了合つた。中の絵の書き方について左のような

ことが書かれてあつた。全く俳句の作り方と同じである。

文芸という所以がここにあるのだと思った。(転載の許可

をもらつています。バルテュスの絵のこと一部孝三さんの鑑賞文

に書かれてあります。)

「アタマで描くな」
絵は目と手で描くもの。テクニック（技術）は体で覚えよ。頭からひねり出した絵は個性ではない。体から自然に出てきたものが個性。眼で見るだけではなく五感で

観ること。触つて確かめ、音を聞き、匂いを嗅いで、世界が広がり豊かになる。固定観念は捨てよ。

「絵はウソである」

旨いウソをつけ。下手なウソはすぐばれる。ウソをつくためには本物を研究しないとウソはつけない。

「こころの目で見よ」

現象だけとらえても絵にはならない。存在・本質・造形・情緒をこころの目でとらえよ。見て、触れて・感じて対象との対話が手を通して表現する。見えない世界も見える世界に。これが絵画。

「絵画のギブアンドテイク」

情報量が限界まで切りつめられた抽象絵画を観るには鑑賞者から何かを発信することもあるということをしつかり認識する必要があります。見る人に感性、知性、経験、場、解釈やその人の視点などが求められているのです。それによつて、アートは成立します。

よくよく考えてみれば、芭蕉も同じことを言つている。笈の小文の中に、西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なりと。論語にもある。吾道は一を以つて之を貫くと。紀貫之は名前をここから取つてゐるとか。こういうことを若いときから気づいて精進しておれば、まだ知らない人生の麗しい境地を味わえたのにと、今更に思

う。72歳になつてこういうことを書いているのは恥ずかしい。しかし、こうなつちやつたのだから仕方ない。分つたからとて、新しい俳句が出来るとも限らないが。

我孫子日記

5／16 例会。5／21 SOA→*日洋展。5／25 → 27 検査入院。6／4 SOA。
6／6 東邦病院。6／8 *都美術館。6／11 SOA。6／13 *3 萱
吟行句会(後楽園)。6／14 → 15 *4 野辺山。6／18 SOA。6／20 例会。

*あぢさゐや友との対話切りもなく

木下闇小鳥葬はふりてかへりみづ

*2 虹よりの魚すべり込む猫の膳

*3 梅雨の蝶蓬萊島を離れけり

木曾山に棕櫚の木もあり木下闇

犬連れて片陰長し築地塀

睡蓮の灯すが如く葵含む

七代の鷹の供養碑木下闇

愛宕坂横を蜥蜴の走りをり

*4 レタス採る膝行前進六人衆

それぞれにナイフ一刀レタス切る

編集後記

今月は絵画展によく行つた。絵のモチーフをどのように決めるのかを考えていて、志賀幹司さんのウェブに突き当たりその中身を読んだ感想を俳窓評論纂に書いた。

バルテュスの絵についての陽一さんの句の鑑賞を孝三さんがなされました。少し遠慮気味に書いてあります。猫ちゃんは、女性たる所以のものの象徴であるというのが西洋の文化らしい。これも孝三さんのご教示であり、私はこれで合点が行きました。バルテュスは日本の文化を愛したらしく、ウイリーの源氏物語が愛読書であったとか、これが展示してあつたのには驚きました。晩年の配偶者は日本女性で、私やみちさんと同い年なのにも驚かされました。

それはさておき、俳句の裾野は極めて広いのですから、どうぞなんでも、ハガキなどの小さい通信手段を使ってでも、文章をお寄せ下さい。そのまま掲載します。俳句は無論であります。

高志
みち

敦子
朋子
高志
一艸人
敏子
良子
珠恵
高志

白金霞 第40号 平成26年6月発行
編集・发行人 光成高志 (TEL & FAX
発行所 〒270-1119 我孫子市南新木2-4-1
表紙の題字 加納綾女 写真は白金霞
17 04-187-068)